

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	呂 思盈
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 台湾人日本語学習者の日本語リズム特性—自立拍・促音・拗音について—			
論文審査担当者 主査 教授 山田 純 審査委員 教授 安仁屋 宗正 審査委員 教授 吉田 光演 審査委員 名誉教授 小川 泰生			
〔論文審査の要旨〕 本研究は、台湾人学習者における日本語音読の拍、母音、子音の持続時間について、日本語話者との相違および中国語からの影響の有無を明らかにするため、台湾人の初級、中級、上級者を対象に実験を行い、両者の関係性について考察した。さらに、その結果に基づき、台湾の日本語音声教育指導に具体的な提言を行った。 第1章では、研究目的を記述し、第2章では、音節、強弱、拍の時間特徴について分析するとともに、子音の持続時間と発話速度による変動について、日本語と中国語に関する研究が少ないことを指摘し、中国人中国語と台湾人中国語における母音の空間が異なるという研究に基づき、両者の母音の持続時間も異なる可能性を調べる必要性を述べた。 第3章は、台湾人日本語初・中級学習者を対象とし、中国語と日本語の音読における拍、母音、子音の持続時間に基づくリズム型を実証的に検討した。その結果、学習者の拍と子音リズムは日本人に比較的近いが、母音が母語話者と異なることを示し、5母音の中の /o/ の大きい逸脱性を明らかにした。 第4章では、台湾人学習者にとって重要な段階である促音の習得について、その音韻的特徴を明らかにするため、中級学習者を対象に、促音語と非促音語について繰り返しの音読実験を行い、阻害音（妨げ音）および前後の母音の持続時間に焦点を当て、日本人話者のデータと比較した。結果は、促音持続時間が安定している日本人に対し、中級学習者の場合、実験対象語の種類に関わらず、ほぼ全員普通の短子音より重子音を長く発音している傾向が見られ、バラつきも大きいことが分かった。促音語の習得を二段階でとらえ、第二段階は、明示的な指示が提供されていない限り、学習者は達成が極めて困難だと結論づけた。 第5章では、促音の閉鎖持続時間（Q）と先行母音（V1）、後続母音（V2）との比率に			

焦点を当て、台湾人初級学習者を対象に音響分析を行った。その結果、(1) 促音前後の母音比 (V1/V2) について、日本人母語話者は1を上回るのに対し、学習者の V1/V2 の値が1より小さくなっており、促音の後続母音を先行母音より必要以上に長く発音してしまう傾向が見られること、(2) 上記の現象は、上級者群では改善されること、(3) 日本人母語話者の場合、9つの対象語のうち、1語の V1/V2 のみ1より小さくなっていること、が観察された。

第6章では、拗音が語尾にある場合、台湾人初級学習者は中国語の発話特徴に影響され、拗音を伸ばして発音してしまう傾向があるという仮説を立て、拗音の音読実験を行った。収集したデータの持続時間を分析し、拗音の長音化の有無および日本語、中国語両方のリズムの観点から仮説を支持する傾向を得た。

第7章では、リズムの等時性を持っていない台湾人中国語の場合、二音節単語を発話する時、第二音節は第一音節より長く発音される特徴がある、という仮説を検証した。その結果、台湾人中国語の二音節の場合、第二音節は第一音節より長く発音される特徴があり、それによる日本語音読への干渉が観察された。それを踏まえて、日本語教育における音読指導および研究の示唆について論じた。

第8章は、まとめと今後の課題を整理した。持続時間の音響分析は、極めて緻密な作業であるため、分析する対象者数と対象語は大量化できず、本論文の限界だと言わざるを得ない。しかし、台湾人学習者の拍持続時間を各レベルについて概略的に把握し、今後の研究の道筋のひとつを示したと言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。